



もうひとつの世界
第三話 そんなにいつぱんに

阿部敦子 著

●著者プロフィール
介護福祉士、認知症ケア専門士、介護支援専門員。2013年に相模原市認知症介護指導者となる。著書に認知症介護小説『ひだまり』（株式会社ソクラ・テクノス刊、No.6版）があるほか、「幻冬舎グループ主催のエッセイコンテスト」で「要介護5度」が大賞を受賞し、電子書籍化

その人の世界

えっ、と言って飛び起きる。急に声をかけられたからよく聞き取れなかった。食事をしてから特に何もすることは無いと思つて、なんとなくベッドに横たわつていた時だった。

「今、なんて言いました？」

私の言葉に、半袖短パン姿の相手はこちらを見る。ドアのノックと同時に入つて来た若い女の子だった。

「お風呂です。今からお風呂なので、お着替えの準備をお願いします」

「お風呂？」

「はい。お風呂です」

「お風呂って、そんな急に言われても……」

「いえ、さっきもお声をかけたんですよ。30分くらい前に」

「いや、聞いていないです」

「まあいいや、とにかく準備をしましょう」

「準備って……」

いきなり言われて戸惑つてしまう。ひとまず靴を履いて立ち上がる。

「えっと……」

準備って、何を準備するのかしら。戸惑う両手がひらひらと落ち着きを失う。

「お着替えです」

着替えの準備。着替えて、何かしら。パジャマ？ まさか。まだこんなに明るいというのに。

「下着とか、お洋服です」

「下着と洋服？」

「はい。上下の下着と、靴下、それから上下のお洋服ですね。私、ちょっと忘れ物をしたので取りに行つてきますね」

一方的に残した相手が部屋を出て行く。

「着替え、着替え……」

何から準備しよう。まずは下着か。

「よしよし」

タンスの引き出しを一番上から開ける。あれ、ここは靴下の場所か。

「まあいいや」

グレーの靴下を取り出し、ベッドに置く。

「それから……」

二段目の引き出しを開ける。あれ、タオルが入っている。

「タオルは使うのかしら」

とりあえずタオルを一枚、靴下の上に置いてみる。

「次は……」

三段目の引き出し。肌着とパンツ。ああ、そういえば肌着は今朝とりかえたんだつた。

「だから……」

パンツだけを取り出すと、さっきのタオルに重ねて置く。

「こんなもんか」

ベッドを見下ろし、自分で置いたタオルとパンツを目で確認する。

「靴下もいるか」

一番上の引き出しを開け、黒い靴下を選ぶ。

「すみません、お待たせしました」

ノックと同時に若い女の子が入つて来た。

「準備はできましたか」

そう言つてベッドに視線を下ろした相手が「ん？」と動きをとめる。

「タオルは必要ないです。お風呂場にあるので」

「ああ、そうだったの。分からなかったから出しちゃった」

「いえ……」

女の子はタオルと、それから一緒に重なつていたパンツと靴下を手を取った。

「靴下は一足でいいです」

「ああ、すみません……」

「あと、上の肌着がないですね」

「肌着、ああ、出していないかった？ ごめんなさい」

慌ててタンスに手をかけると、相手は私の肩に手を乗せた。

「それじゃあ先にお熱を計らせてください。今朝、微熱があったみたいなので、もう一度測らないといけなかったんです」

早口になった声から軽い苛立ちを察する。大人しくベッドに腰を下ろすと、体温計を脇に挟んだ。

「お熱は……大丈夫みたい。36度9分でした」

体温計を取り出した相手が言う。

「そうですか」

「体温計を返してきちゃうので、お洋服の準備をお願いしますね」

「はい……」

女の子が出ていくと、私はクローゼットを開けた。何を着ればいいんだろう。どこに出かけるわけでもないのに。どうせずっとこの建物の中にいるんだから、着替える必要なんかないじゃない。お風呂だって必要ない。べつに運動して汗をかくわけでもないし、汚れるようなこともしない。

「あーあ」

ベッドに座ると両足を投げ出した。そもそも向こうが言いだしたお風呂なんて、断ればいいのよ。こんな昼間からお風呂なんて入りたくないし、私が入りたいと言ったでもない。

「準備はどうですか？ あら」

入って来た女の子は、ふてくされた私の前にしゃがんだ。私と言った。

「もうお風呂は入らなくていいです。面倒くさくなっちゃった」

「面倒くさくなっちゃったんですね……」

小さく俯いてから、女の子は私と目を合わせた。

「ちゃんとお伝えできていなくてごめんなさい。今日はせっかくのお風呂の日なので、ぜひ一緒にさせてくださいね。いつもおしゃれにされているから、私が勝手に選んでしまうよりも、ご自分で選ばれた方がいいかと思っただけです」

ゆつくりと、穏やかに、ひとつひとつの言葉に込められている思いがあると分かる。この人は悪い人ではない。私はそれを分かろうとしなければいけない。そんな気がする。

「靴下とパンツはもう出してくださいだったので、あとは一緒に選ばせてくださいね。上のお洋服はどれにしましょうか。どれもおしゃれだから、迷っちゃいますね」
口をすぼめて笑顔をつくった女の子につられ、気付けば私も微笑んでいた。



「似たようなのばかりだけど、どれも昔からのお気に入りなのよ」

二人でクローゼットの前に並び、ハンガーにかかったブラウスに触れる。

「これも素敵」

女の子が手にしたのは若草色のブラウス。肌触りの良い、一番のお気に入りだった。た。

「これね、主人と横浜に行ったときに買ったの。ちょっと高かったんだけど、そんなに欲しいなら買ったらいいって」

「わあ、そうだったんですかあ」

女の子が顔をくしゃくしゃにして微笑む。

「今日のお天気は爽やかだから、お風呂の後に着たらきつと気持ちいいですよ」

「あら、そうなのね。じゃあこれにしよう」

ブラウスを軽くたたみながら、久しぶりにおしゃれがしたくなっている。今日はスカートにしようか。タンスの上に置いてある写真立ての中で、夫の笑顔が少しゆるんだような気がした。

美代子さんは服の組み合わせにうるさい。それは知っている。服と靴下の組み合わせにもこだわりがあるし、下の服をズボンとスカートのどちらにするかで肌着も変わる。ケアスタッフが選んだものは、いざ着るときになって文句を言い出し、湯冷めするほど時間がかかる。前日までに準備したものは、たとえ自分で選んでも自分で選んだことを忘れているから同じことが起こるときもある。

「今、なんて言いました？」
ベッドから起き上がった美代子さんは明らかに驚いている。こうなるから、予告をしておいたのに。

「お風呂です。今からお風呂なので、お着替えの準備をお願いします」

「お風呂？」

「はい。お風呂です」

「お風呂って、そんなに急に言われても……」

「いえ、さつきもお声をかけたんですよ。30分くらい前に」

「いや、聞いていないです」

「まあいいや、とにかく準備をしましょう」

「準備って……」

美代子さんが靴を履いて立ち上がる。やっぱり今日もここから始めないとためか。入浴予定者が一人キャンセルになったから割と時間の余裕はあるけれど、毎回そうはいかない。

「えっと……」

手のひらをひらひらさせた美代子さんの視線が泳ぐ。

「お着替えます」

さつきも言ったけれど、もう一度伝える。表情をくもらせた美代子さんが、窓の外を見やる。何か言いたそうだ。

「下着とか、お洋服です」

「下着と洋服？」

「はい。上下の下着と、靴下、それから上下のお洋服ですね。私、ちょっと忘れ物をしたので取りに行ってきますね」

美代子さんの部屋を出ながら、そうだったと慌てる。朝食後に微熱があつて、入浴前にもう一度測るように申し送られていたんだ。

「だから、この間も説明したでしょう」

体温計のあるケアステーションに入ると同時に、副主任の声が耳に響く。

「すみません……」

女性の副主任の前でしゅんと頭を下げているのは、私と同期の女の子だった。私たちは一ヶ月前に今の職場に就職した。研修は受けていたけれど、お互いに介護の仕事なんて初めてだった。

「メモはちゃんと取ってるの？」

明らかに副主任の声は尖っている。同期の彼女が何かをやらかしたのだと分かるし、聞いているだけで震えあがってしまう。この人に気に入られなくて辞めた人がいると、噂で聞いたことがあった。

「取っています……」

「じゃあどうしてできないの？」

「えっと……」

「前にも言ったよね。電源を入れないとお湯が出ないって」

「は、はい……」

「おぼえてるの？」

「あ、はい……」

「じゃあ、どうしてできなかったの？」

「それは……」

聞いている私までいたたまれない。泣き出しそうな同期をどうにかしてかばいたいと思うけれど、口出しできる空気ではない。

「もういい。あと一回だけ説明するから、今度はちゃんとメモを取ってね」

「はい。ありがとうございます……」

近くのデスクにあった紙とペンを同期に手渡すと、同期は涙をいっぱいにためた目で私を見た。

「まず、必要に応じて脱衣場のエアコンをつけます。それから脱衣場に椅子を並べて、バスタオルをかけます。椅子の隣に脱衣かごを置いてください。浴室の洗面台には、入る人数より少し多めにフェイスタオルを置きます。シャンプー類の中身が少なくなっていたら補充しておいてください。シャンプー類と洗面器を置いたら、次に浴槽にお湯をはります。その前に必ず給湯の電源を入れてください。最後に滑

り止めマットを敷きます。いいですか」

副主任の言葉をひとつも漏らさないように、同期が必死でペンを走らせる。説明に追いついているようには到底見えない。

「大丈夫ですか」

「はい……」

「じゃあ、次こそはよろしくね」

副主任が出て行っても、同期はまだメモを取り続けている。かける言葉もないまま、私は美代子さんの居室に戻った。

「すみません、お待たせしました」

居室では美代子さんが、タンスとベッドの間で棒立ちになっていた。

「準備はできましたか」

声をかけて中へ入ると、ベッドの上に視線がとまった。

「ん？」

タオルが置いてある。

「タオルは必要ないです。お風呂場にあるので」

「ああ、そうだったの。分からなかったから出しちゃった」

「いえ……」

手に取ると、パンツが一枚と、靴下が二足あった。

「靴下は一足でいいです」

「ああ、すみません……」

「あと、上の肌着がないですね」

「肌着、ああ、出していないかった？ ごめんなさい」

慌てた様子で美代子さんがタンスの引き出しに触れる。待って、その前に検温させてもらいたい。ここからは巻いていかないと。美代子さんの肩に手を乗せると、その手でベッドの方へ促した。

「それじゃあ先にお熱を計らせてください。今朝、微熱があったみたいなので、もう一度測らないといけなかったんです」

体温計を脇に挟みながら、美代子さんの表情が歪んでいる。

「お熱は……大丈夫みたい。36度9分でした」

体温計を取り出しながら言うと、「そうですか」と美代子さんが抑揚もなく呟いた。

「体温計を返してきちゃうので、お洋服の準備をお願いしますね」

「はい……」

居室を出てケアステーションに行くと、同期が取り終えたメモを確認しているところだった。

「大丈夫？」

私の言葉に顔を上げると、彼女はかつてないほど低い声で呟いた。

「あの説明じゃ、私には理解できない。あの人もいつべんに説明するでしょ。時間がないのは分かるけど、伝わらなかつたら意味がない。あの説明で、他の人たちはすぐにできるようになるの？」

彼女はそれきり、唇を結んだ。

「そうだね。やつぱり、ひとつひとつの動作ごとに説明があるといいよね。できないことを確認してもらいながら、質問したりできるといいよね」

「うん。お手本が必要なときもある。言葉では分からないことは、見せてもらいたい」

「それ分かる。一緒にやってもらわないと分からないよね」

「うん……」

深くため息をついた同期は、自分のメモに視線を落とした。

「大丈夫？」

「うん……。なんか私、面倒くさくなっちゃった」

「面倒くさくなっちゃった？」

「うん……。一生懸命やるのが」

彼女なりに必死なんだ。私はひとつ深呼吸をした。

「みんな頑張ってるよね。頑張っていない人なんかいない。そのことを忘れないようにしよう。私たちは今は新人だけど、これから入ってくる新人さんにはちゃんと教えてあげられる先輩になろう」

「先輩に……」

「そうだよ。新人さんの気持ちを分かかってあげられる先輩に」

「うん……」

「みんな、その人なりに一生懸命なんだよね。私たちも、先輩も、入居者さんも」

「みんな……」

「ありがとう。私、すごくいいことに気がついた」

「いいこと？」

「そう。あとで話すね。お風呂頑張ろうね！」

「準備はどうですか？ あら」

「準備は……」

「準備は……」

「準備は……」

美代子さんは、ベッドに座って両足を投げ出していた。美代子さんの前に私はしゃがみ、相手の複雑な表情を見上げた。美代子さんが言った。

「もうお風呂は入らなくていいです。面倒くさくなっちゃった」

「面倒くさくなっちゃったんですね……」

「面倒くさくなっちゃったんですね……」

「面倒くさくなっちゃったんですね……」

さつきとは違う自分がここにいる。美代子さんが教えてくれたことを、私は自分の姿勢で返したい。みんな、一生懸命なんだ。